

天命の秋をデザインする人

山本倫子詩集『秋の蟻螂』に寄せて

1

山本倫子さんの詩作には、しなやかに人生を選び取ってきた清々しさがある。そして過ぎ去った時間が精神的な価値として蓄積されている。そのように生きてきたことの豊饒さを感じさせてくれる詩篇は、読むものをきつと幸福にさせ勇気づけるだろう。なぜなら、山本さんが自分を生かしてくれた他者に対して深い感謝や畏敬の念をいつも反復しているからに相違ないからだ。

山本さんは今まで五冊の詩集（連詩集、歌集は除く）を出しているが、第一詩集『デザイン・ノート』は五十歳代になってからだ。服飾デザイナーでありながら、子供たちを育てた主婦であり、若いときから詩を書きたいと願っていたらしいが、多忙で叶わなかったという。ようやく子育てを済ませた後に、服飾デザイナーの仕事も辞めて自分が本当にやりたいた詩作の道に入られたという。だが決して遠回りではなく、今までの美意識の経験を生かして詩作を熱烈に求めてきたのだろう。しかしそのような時期に定年退職されたご主人が癌に罹ってしまう。山本さんの日常はご主人の介護に多くの時

間を費やさなければならぬ状況になる。そんな困難な逆境の中で山本さんは本格的に詩作を開始し始めたのだ。第一詩集『デザイン・ノート』の中で次の詩篇が山本さんの特徴をよく表していると思われる。

地色と図柄色

グレーはやさしいね
時には地色となって
わたしを浮び上らせる

ああ そのときは わたしは図柄なのだ
黄色いチュールリップを咲かせていた春は
うすい

イエローイッシュグレーの霧が
わたしを包んでいた
アガパンサスのように咲いてみたいとき
梅雨空は

青いほむらをなおも青く
炎えたたせるのだった
秋になり

南京はげの 黄葉 紅葉が舞い散るとき
坂の石みちは
長い灰色の影を曳き

名残りのくれないをはりつける

落葉を焚くころ

わたしはどこへ行くのだろう

天か

それともやさしい灰の下で

地に潜って

赤い火種を囲うのか

(デザイン・ノート 6)

山本さんの詩には、世界というキャンバスを「デザイン」したいという願いがあふれている。グレーの下紙と多様な色紙を使い、他者の洋服のイメージを「デザイン」していく職人的な方法で詩を試みているかのようだ。一人の女性のためにこの世で初めて現われるドレスを構想するとき、山本さんは自由な発想で、他者の姿態や精神から服装を創造していったのだろう。山本さんの他の「デザイン・ノート」の詩篇を読んでいると、日常の洋服はもろんだったろうが、画家のモデルのドレス、夜の女性たちのドレスなどの華やかな衣装のデザインをしていたことが描かれている。山本さんは「デザイン」を通して世間の様々な他者とその喜びや悲しみと接してきたことが分かるのだ。山本さんは祖父のように国語の教師になりたかったそうだが、経済的な事情や母の勧めもあり服飾デザイナーになったそうだ。「デザイン・ノート

6」を読んでいると、今までは他者の衣装のデザインをしていたが、今度は言葉を使って自己の内面を世界のキャンバスに描こうと決意したのでだろう。その記念すべき詩作品がこの詩篇のように思われるのだ。山本さんの詩作することへの憧れが滲み出ているだけでなく、立体のキャンバスに色を落とすような独特な詩法なのだ。そして絵具や色紙の間から最後の六行が立ち上ってくる。「落葉を焚くころ／わたしはどこへ行くのだろう／天か／それともやさしい灰の下で／地に潜って／赤い火種を囲うのか」。山本さんにとって重要なことは、今を誠実に生きることしかないのだろう。天に行こうが、地に行こうが、それはなすがままであると告げている。その他に第一詩集には、謎のような詩「夫の葉」がある。

夫の葉

彼女は気安くうなづいた。「こちらへどうぞ」と先に立つて歩く。蒼黒い貌をした男や、黄色の肌の女たちが屯している部屋の廊下を通り過ぎ、非常口から外に出た。

外は見なれた大通りでなく、車も人影もない。小高い丘の松林の中に、平屋建ての灰色の屋根が見えている。丘に登ると低い家が現われた。頭を下げて入ると、内部は暗く、天井はわたしの背の高さすれすれなのだ。早々に出て町へ降りると、町の入口には萬屋と看板の上がった店があった。

萬屋の女主人はふくよかな人で、うつすらと紅を刷いた頬が印象的であった。わたしは気分が明るくなり「夫に薬

を飲ませる時間です。夕食の支度も気になっていきますので……」というと、その女主人は、「お大事にね」といった。萬屋を出ると、確かに覚えのある町並みが夕闇の中に続いている。「ここは何番地？ 何丁目ですか」とたずねると、にこやかに「あなた、ここには番地はありませんよ、町名なんてものはありません。行きたければ何処へ行ってもいいですよ」というのであった。

職人的でリアリズムの詩人である山本さんが、夢の詩を試みている。癌に罹ったご主人の薬を探しに当てもなく彷徨っていき、とある萬屋に入っていく。しかしそんな特効薬はどこにもないのだと、萬屋の女主人から言われた「お大事にね」などの言葉で悟らされる。そして「行きたければ何処へ行ってもいい」という言葉が真実のように感じ始めるのだ。山本さんの深層に現れたこの不思議な夢がその後を予見しているように感じられる。「夫の葉」とはどこにもありはしないという絶望から、残された夫の時間をともに豊かに生きて行こうと暗示をしているのではないか。山本さんの詩には、絶望を逆転させて希望に転化させてしまう強さがある。それはきつと山本さんの中にある民衆のしたたかな楽天性がなせる業だろう。

第二詩集『秋の狂』は序詩を含め三十三篇が収録されている。序詩では「夕映えがわたしを包んで／染まるときには／すこし発熱／すこし狂って／下り坂をひき返す／山の端の入り陽に真向う。」と記している。夕映えの中でも、物はみな彩りを刻々と変えていく。夕暮れと秋と自分の人生を三重に重ねている。そこで「すこし発熱／すこし狂って」いく自分の情熱の在りかを直視しようとしているのだ。人には夕映えにしか見えないものが、山本さんには豊饒なものとして見えなかったものが見えてきて、また聞こえてきたのだろう。一章の「風の掟」の冒頭には次の詩がある。

日々の音

朝 昼 晩

夫のたべものを

わたしは音を立てずに刻む

ミキサーにかけるよりはすこし荒く

ミジン切りよりはもうすこし細かく

包丁のミネにひとさし指の腹をあてて

たべものの組織から

粘りが出るくらいに

タテ ヨコ ナナメ

音を立てないように刻む

原型が

すっかり失くなってしまっ

本来の味も

どこかへ行ってしまったのではないか

わたしがつくる夫のたべもの

それを皿に盛って

食卓に置く

彼が

食事を終えると

わたしは

はなれてひとりの食事をする

レタスを手でちぎり

トマトをかじる

うづく指

板ずりの青いキュウリを

音を立ててかみ砕く

どこかで

トン トントントン

からやかな包丁の音 遠い音

失くなってしまったもの
夫の食道
を
通過していった日々の音が聞こえる

この詩を読むたびに、家族の介護とは何かを考えさせられる。失くしてしまった体の機能を補うことは、山本さんにとってひたすら料理を刻み「粘りが出るくらいに」してしまうことだった。このような手作りの介護料理は大変なはずだが、山本さんにとっては当たり前のことで、その無音に近い刻む音に誇りさえ感じられる。その時に山本さんは「夫の食道／を／通過していった日々の音が聞こえる」という心境になっ

ていく。「夫の食道」の代わりをする行為が、行為を超えて夫の生きてきた軌跡やその時代を受け止めようと思っようになつたのではないか。「日々の音」に耳を澄まして生きること、序詞の「山の端の入り陽に真向う」といった美しい光景を見ることと山本さんにとって全く同じ行為なのだ。

詩「風の掟」のテーマは、新詩集『秋の蟬螂』へと繋がっていく山本さんの生涯の深い問いを秘めた詩だ。

風の掟

蠅螂が
相手をがちり押え込んで齧りはじめた
ななめの陽ざしを
受けている石塀の上で
掟に従って
喰い
喰われている
貌すがた

たべるたのしみがあるように
たべられる快感
と いうのも あるのでは ないか
そうでなければ……

透きとおる風が吹く
恋人 夫婦 親子 の 関係
その上に
季節が絡む自然の掟
わたし

すこし弱つたのだろうか
風のなかで
いまはしずかに
たべられてもいいような き・も・ち

によって、第四詩集以降の戦争責任を担っていく詩篇の端緒
となっていくのだ。

のどもと過ぎない

煮え湯を飲まされたような
とか
煮え湯を飲んだような
とか
一度や二度はいうけれど
のどもと過ぎればいつしか忘れてしまっ

夫の場合
のどもと過ぎれば
なんて

いつてられない事情が残った
満州でペストが流行した
患かった満人が家ごと焼かれたそうだ
隔離された夫は
煮え湯を飲んだのです
薬罐から煮え湯を！

ペスト菌は

山本さんは夫の介護を通じて人間という命が生きながらえていくことも、過酷な生命輪廻の掟にも続いているのではないかと自問してくる。蠅螂の雌が雄を食べてしまうのを通して、生きている「恋人 夫婦 親子 の 関係」も、そのようなヒューマニズムを超えた生命の見えない「自然の掟」によって成り立っているのではないかと思い始める。そして「たべられてもいいような き・も・ち」を感じ始めるが、「すこし弱つたのだろうか」という自覚のもとでこの問いを継続して考えているのだと思われる。いつかは愛する人びとへこの身を投げ出すように、命とは食べられる存在であることを徹に透視しようとしている。その意味では、死へ向かう存在である一回限りの実存を、夫の介護を通して山本さんは見詰めてきたのだ。「食べられてもいい」という覚悟は、夫婦愛を超えて、生あるものが突き詰めた果てに至りつく心境のように感じられる。山本さんの詩作は優しい言葉で書かれているが、実は重たい問いを発している詩なのだ。

3

第三詩集『生きやしてもうてる』は十八篇の詩集だ。夫の癌の告知から病院での手術や闘病生活を記した詩篇以外に、この詩集には今までの詩集にはないご主人の戦争時代に関する詩篇が出てくる。その詩「のどもと過ぎない」は山本さん

熱に弱いそうです
ペストで死ぬよりはと
煮え湯を飲んで
しばらく寝込みました

煮え過ぎる鍋物を好む
熱いものをやすやすとのどに通した
食道を切除した今も
朝 昼 晩
おかゆを煮え過ぎらせている
生ぬるいおかゆなんか
食べられるか――
なんて
顔で

山本さんは夫の食道癌の遠因となった煮え湯を飲んだ話に触れている。満州にいた夫は、何度も死線をさまよったらしいが、ペストに罹ったことがあった。後の第四詩集『以後無音』の詩「実験」で明らかになるが、このペスト菌は、日本軍の七三一部隊が中国で空爆などではらまいたものであったらしい。これらの詩においては、夫の過去を冷静に受け止めようとしていることが分かる。そして夫が自らの運命を毅然と決断していく姿に山本さんは、逆に勇気づけられ、夫の生

き方に敬意を抱いて書き上げているのが読み取れるのだ。そして不幸な逆境の中でもわずかな希望を見だし生き抜いた夫の姿に、同世代の多くの人間たちの姿を重ね合わせていたのだろう。

4

第四詩集『以後無音』には、夫の戦争時代の体験である三篇の詩「以後無音」「実験」「銃声と静寂」が冒頭に置かれている。詩「以後無音」には驚くべき事実が記されている。

以後無音

鉄道隊にいた彼は

鉄路の行く先を知っていた

着かず離れず鉄路に沿って行く

牡丹江付近から奉天まで

撃たれた足を引きずって

こどものとき

土佐犬にまんじゅうを見せたあと

石ころを口に入れたというから

人が怖がる野犬^ノなど怖くはないのだ

怖くはないが人に会おうのを恐れた
殺すか 殺されるか

生き残った二人が何を話し合って
何を食べて辿り着いたのだろうか

飢餓は ひもじさだけでは推し測れない
生きる ということは食うということ
食う ということの人の罪

恥ずかしさ おぞましさ

こうして二十三歳の青年は無傷の人と

日本人の集っている奉天まで辿り着いた

固い握手の後 二人は別れた

以後無音

詩「銃声と静寂」によると夫は、ソ連兵の監視の下でシベリア送りになり、列車から飛び降りて脱走する計画を立て、仲間を誘いそれを実行した。「夫の提案にシベリア送りの／ギツシリ詰まった車輜では／実行するものは彼を含めて三人だ」という。三人の中の一人は銃殺され、「夫は足に銃弾を受けた」。無傷だった戦友と一緒に奉天まで逃げたことを記したのがこの詩だ。この映画の脱走シーンのようなことを実際に計

画し実行した夫の記憶を山本さんは、夫の承諾を受けて書き残すべきだと考えた。そしてこれらの詩篇は「コールサック」三四、三五、三六号に掲載されたものだ。あとから聞いた話ではこれらは「コールサック」に相応しい作品だと考えて寄稿したという。私は詩「以後無音」が夫の体験だけで成り立っているのではなく、「食う」ということの人の罪／恥ずかしさ

「おぞましさ」を踏まえて、それでも生きねばならない人間の宿命を山本さんは描こうとしているのだと考えられる。このような過去をもつ夫を書いてしまう山本さんは、戦争責任や歴史に翻弄された民衆の痛みや悲しみに向き合おうとしているのだ。そしてそれを支援した夫は、表現者としての妻の才能を愛する最良のパートナーだったように思える。

5

第五詩集『落花相殺』は夫への追悼詩集になってしまった。私は夫の戦後の生き方を記している「思案」という詩が気に入っている。夫の生き方が芸術作品のように思えてきたからこそ山本さんは記したに違いない。

思案

紙一枚の束縛からの解放
博多について別府に向う

復員時に支給された有金を
旅館の女将に全部渡した

この分だけここで逗留させてほしいと言った彼に
気つ風のいい女将は快諾
一カ月余りを滞在させた

撃たれた足を温泉に浸し
癒して 体力も回復した
独身の彼は帰るべき場所
と向うべき道を思案した

かすかな音波も逃さぬ耳
精密な通信機を分解して
分解順に並べ一体と成る
べく組み直した通信技術

満州の空でキャッチした
情報は語ったのだろうか
語らなかつたのだろうか
一級無線技術を捨てた彼

別府で練った思案の実行
戦後の復興 福祉の仕事
大阪市役所に入りたいが
コネクションは一切ない

人間としてではなくて
紙代で——ということ
大阪市役所に入った彼の
職務場所は今宮市民館だ

紙代なので仕事は雑役だ
朝は六時から掃除をする
余った時間は紙芝居制作
スラムのこどもを集めた

紙代から人への昇格試験
人として公務員三十二歳
三代目の生野児童館長だ
若い館長の夢試案又思案

戦後の大阪の福祉行政を試行錯誤しながら切り拓いていっ
た夫の時間を、山本さんは介護の時間を通して生き直してい
たのだろう。ゴーストライターのように夫に寄り添ってこの

倫子という詩人の全体像が浮き彫りにされるだろう。詩集タ
イトルの「秋の蠅」は、山本さんの詩作が至りついた深い
思索が垣間見えてくる。山本さんは天命の中に秋を^ま発見し、
それを慈しみ、それをデザインしている詩人だ。そうだから
こそ、夫婦とは何か、家族を介護するとはどんなことか、他
者のために自分の時間を費やす時に自らを豊かにすることが
できるか、真に戦争を経験したものたちとは誰か、生き残つ
た者たちは真に平和な時代をどのような精神で創るべきなの
か、愛するものを失った後に生きるとはどんな意味があるの
か、そんな生きる場所からの多くの問いに山本さんの詩篇は
寄り添って勇気付けてくれるはずだ。最後に、詩集タイトルの
「秋の蠅」を引用して論を終えたい。

秋の蠅

喰うということは

食欲を満たし快感を伴うが
何かを欠損させ

そのもの自体を失せさせる

喰われるということば

疼痛を伴い傷が付き

惨烈を極めれば

詩を書き記したのかも知れない。この詩に出てくる夫は逆境
の中から光を見つける予知能力のある純粋な人物だったよう
に思える。自分一人だけでなく多くの他者の幸せを考えて行
動し、人生を芸術化した人物だった。妻である山本さんに記
されてきつと本望だったろう。山本さんは夫を戦争に翻弄さ
れた同世代の貴重な経験を持つ他者として見て、淡々と書い
ているところがいい。二〇〇一年十一月、この詩集が出るち
ょうど一年前に夫は亡くなった。最後まで読みたい本もあり
生きる意志があったという。

6

新詩集『秋の蠅』には四十二篇の詩が入っている。第一
章「秋の蠅」では夫と暮らした家や故郷となった場所を単
なる回想ではなく、今も生々しく息づいている場所として記
している。第二章「出来すぎのはなし」では、暮らしの中で
見過ごしていたもの、歴史に埋もれていたもの、そんな様々
なものたちからの呼びかけに応答するような詩篇だ。山本さ
んのしなやかな面が発揮されている。第三章「彩のある場所」
は、洋裁のデザイナーであった山本さんのデザイン力を詩作
で生かした詩篇群だ。そして第四章「語らずにはいられない」
は、夫と同世代の大正生まれの兵士たちへの鎮魂とその無念
を「語らずにはいられない」という思いに溢れた詩群だ。新
詩集はその意味で山本さんのテーマ群がすべて出揃って山本

死に到る

人と人

国と国

喰い 喰われる関係が

無限連鎖のように続いている

喰われ方 食わせ方 喰い方を

秋の蠅の貌^{かま}に見た

自然の掟に従うごとく

喰い 喰わせている

私は夫に身を喰わせ

夫の精神をいくらか喰ったが

全面的に喰い喰われなかったから

わたしが残っている

人と人は国と国は

喰いつくしたり喰わせ続けてはいけない

たとえ 喰われることに

快感を覚えたとしても

私の敬愛する原爆詩運動を提唱し続けた浜田知章さん、シ
ベリア抑留や中国戦線の死者たちを書き続けた鳴海英吉さん

や山本さんの夫の世代は、日本の歴史上最も過酷な運命に曝された人間たちだ。この詩の最終連は、山本さんの言葉であるけれども、山本さんの言葉を超えて、戦争に加担させられたが、真に平和を願った夫の世代の思いを背負って語られた、後世に残すべき最良の詩行だろう。私の父の世代が残した不戦の思想である詩行を私も心深く反復していきたいと考えている。